

津軽方言のオノマトペ

——音韻構造を中心に——

坂 本 幸 博

1. はじめに

オノマトペは音声の持つ特殊な情感を利用して、端的に事物の音や状態を描写する。また新語を造る力も強く、初めて聞く語であってもその響きから雰囲気をつかむことができる。しかし、それらは言語としての「語」、つまり言語音で表現した言葉である限り、特定の形において音や状態を表現するものであり、現実の音からは離れて言語体系の中に存在しているものである。

共通語のオノマトペの研究は、歴史的な観点も含め、古典語から現代語まで盛んに行われており、辞典も数多く出版されている。一方、方言のオノマトペを研究したものは少なく、概説書や語彙集で比較的簡単に記述されているものがほとんどである。

しかし、近年、方言のオノマトペは注目されてきている。地方の医療現場において、患者の使用する方言を看護師や医師が理解できず、これまでの概説書や語彙集では、そうした問題が解決できないとの声が多くあげられるようになった。患者が自身の症状や体調を説明する際、必死になればなるほどオノマトペが効果的に使用される。方言のオノマトペは語形が共通語のものと一致しても、その表す意味内容が全く異なっている場合が多々あり、そのことは医療行為に支障を来しかねない。竹田晃子（2012）はそうした問題に対処すべく、医療に関係する東北方言のオノマトペを収

集したものである。

また、共通語のオノマトペを綿密に記述・分析した浜野祥子（2014）において、津軽方言の用例が共通語の資料に欠けている部分を補えることが示されている。そして、そこでは、

特にオノマトペのように組織的な体系の場合、個々の方言について個別の体系として深く研究される必要があると著者は考えている。
(p.162)

と述べられている。

そこで、本稿では津軽方言のオノマトペが、どのような音韻構造を持っているかを明らかにしたいと考える。津軽方言のオノマトペの音韻構造を詳しく分析した先行研究は少なく、佐々木隆次（1971）が挙げられるのみである。佐々木（1971）以外には、鳴海助一（1965-69）や松木明（1982）などに代表される津軽方言の語彙を収集した語彙集に、多くのオノマトペが載せられている。今回はこれらで述べられていることを確認しつつ、津軽方言のオノマトペの音韻構造を中心に記述・分析していきたい。

2. 調査法とインフォーマント

調査は質問形式による面接調査を行った。インフォーマントは以下の通りである。

- A 氏：男性（60代） 青森県弘前市在住

父親の出身地 青森県五所川原市：母親の出身地 青森県南津軽郡大鰐町

- B 氏：女性（60代） 青森県弘前市在住

父親の出身地 青森県黒石市：母親の出身地 青森県弘前市
二名ともに津軽方言のネイティブスピーカーである。

3. 音韻形態

3.1 一音節語基

- (1) CV_Q ガッ サッ ボッ
- (2) CV_N ガン バン ボン
- (3) CV_V ガー キー ゴー
- (4) CV_{VQ} ガーッ キーッ ゴーッ
- (5) CV_{VN} ガーん キーん ゴーん

(ここでの_Qは促音, _Nは撥音, _Vは長音を表す。)⁽¹⁾

基本的にこの5つのパターンが挙げられる。共通語の「ふ(と)」や「つ(と)」のような単なる一音節語基のものは津軽方言には存在せず、特殊音節を伴った(1)~(3)の形態で存在している。佐々木(1971)では一音節語基のものとして本稿の(1), (3), (4)の形態のみを挙げており、(2), (5)は二音節語基のものとして挙げられている。これは撥音を一音節を構成するものとして捉えているためと推測できるが、津軽方言の特殊音節は独立性が弱く、単独では一音節を構成しない⁽²⁾ので、(2)を二音節語基に加えることは不適切であると考える。次に(5)の形態を考える。(5)は(4)と同様、特殊音節が2つ続いた形態である。佐々木(1971)では(4)の形態を一音節語基に加え、(4)の形態は(3)のCV_Vの形態と発音上区別が付きにくい場合が多いと述べている。これを詳しく検討していくと、(3)と(4)の形態でCVに同じ音が現れた場合には、発音上および意味上区別がつかなくなる。

(例) (3) CV_V (4) CV_{VQ}

- (a) ボー ボーッ
- (b) ビー ビーッ
- (c) ブー ブーッ
- (d) ザー ザーッ

(a) は (3), (4) のどちらも共通語の「ぼーっとする」と同じく、ぼんやりしている様子を表す語である。(b) は (3), (4) のどちらも津軽方言ではラジオに入った雑音を表す語である。(c) は (3), (4) のどちらも共通語と同じく、ブザーの音やそれに類する音を表す語である。(d) は (3), (4) のどちらも、共通語と同じく雨の降っている様子を表す場合や、テレビに入った雑音や映像の乱れを表す語である。次に (3) CV_v と (4) CV_{vQ} の違いを具体的にみていく。

3.2 (3) CV_v と (4) CV_{vQ} の違い

(d1) Q: アメ フッタドギノ オド ハ? (雨が降った時の音は?)

A1: ザー / A2: ザーッ

(d2) Q: アメ ツエゲ フッタドギノ オド ハ? (雨が強く降った時の音は?)

A1: *ザー / A2: ザーッ

(d1) の質問文は単に雨の降っている時の音を質問しているので、A1 の CV_v でも A2 の CV_{vQ} のどちらでも成立する。しかし、(d2) の質問文は雨が強く降っている時の音を質問しているので、A2 の CV_{vQ} は成立するが、A1 の CV_v は成立しない。このように、(3) CV_v の形態に対して (4) CV_{vQ} の形態は促音がついて強調されたものであると判断できる。ただ、実際に発話される場合には、(4) CV_{vQ} の形態で現れることがほとんどであり、(d1), (d2) の例文は特殊なものであるといえる (注(1)参照)。

以上の検討から、(3) の形態と (4) の形態はお互いに密接に結びついており、促音はその音や状態を強調するためのものと捉えることができる。そこで (4) の形態は一音節語基として考えることができる。それに伴い、同じく特殊音節が2つ続いた形態である (5) CV_{vN} も一音節語基として考察していくべきである。

この (3) CV_v と (4) CV_{vQ} の違いは、共通語を対象とした田守育啓

(1991)でも問題にされている。田守(1991)でも(4) CV_vQ の形態を一音節語基として認めている。しかし、その考察の過程においては、津軽方言を対象とした本稿とは異なった見解が示されている。

CVVQ という音韻形態は、形式的には CVV という形態に促音 Q が付いたものであると考えられるが、CVQ という形式の母音 V が長音化されたものであるとも考えられる。例えば「かーっ」は「烏がかーと／*かーっと鳴く」及び「僕はつかーと／かーっとなった」から明らかなように「かー」とは全く関係なく、「かっ」に関係しておりその強調形であるとも考えられる。また「夕立がざっと／ざーと／ざーっと降ってきた」のように「ざーっ」が「ざっ」と「ざー」の両方の形態と関係している場合もある。しかしながら、一般的には CVVQ の形態は CVV ではなく CVQ と関係している場合が多い。(p.16)

これをみると、本稿の考察とは異なり、(4) CV_vQ (CVVQ) の形態は(3) CV_v (CVV) の形態よりも、(1) CV_Q (CVQ) の形態に関係しているということが述べられている。しかし、津軽方言を対象にして同じように分析してみると、共通語のものとは異なった結果が導き出される。

(例) (1) CV_Q (3) CV_v (4) CV_vQ

- | | | |
|--------|----|-----|
| (a) ボッ | ボー | ボーッ |
| (b) ビッ | ビー | ビーッ |
| (c) ブッ | ブー | ブーッ |
| (d) ザッ | ザー | ザーッ |

(a) では(1) CV_Q の形態(ボッ)は怒って興奮した様子を表す語になる。それに対して(3) CV_v の形態(ボー)と(4) CV_vQ の形態(ボーッ)は、「ぼーっとする」様子を表す語となる。また(b)では(1) CV_Q の形態(ビッ)は、しゃきとした様子を表す語になる。それに対して(3) CV_v の形態(ビー)と(4) CV_vQ の形態(ビーッ)は、「ラジオの雑音」を表す語となる。さらに(d)では(1) CV_Q の形態(ザッ)はおおまかに目を通す様子を表す語になる。それに対して(3) CV_v の形態(ザ

一)と(4) CV_vQ の形態(ザーッ)は、「雨の音やテレビの雑音」を表す語となる。しかし、(c)の(ブッ／ブー／ブーッ)の例では、(1) CV_Q の形態、(3) CV_v の形態、(4) CV_vQ の形態の間に意味の相違は認められず、すべて「ブザーの音やそれに類した音」を表す語となる。

以上のように、津軽方言では共通語を対象とした田守(1991)の場合と異なり、(3) CV_v の形態と(4) CV_vQ の形態が関係している場合が多く、その促音は強調の役割を担っていると考えられる。

3.3 一音節語基の重複

次に一音節語基が重複した形態をみていく。津軽方言では「3.1 一音節語基」で取り上げた(1)～(5)の形態すべてにおいて、重複した形を作ることが可能である。しかし、(1)～(3)においては、繰り返された語基の特殊音節(末尾の特殊音節)が脱落する現象が起こる。

(1') CV_QCV ガッガ サッサ ボッボ

(2') CV_NCV ガンガ バンバ ボンボ

(3') CV_vCV ガーガ キーキ ゴーゴ

共通語においても(1')のような形態の促音の場合には、「さっさと歩く」や「かっかする」のように、末尾の特殊音節が脱落した形態をとることはある。しかし、(2')や(3')のように撥音や長音が脱落した形態をとることはない。

この法則は(4)、(5)の形態で重複した形態を作った場合にも現れる。しかし、その場合には脱落するのは長音のみであり、長音の次に来る促音や撥音は脱落することはない。

(4') CV_vQCV_Q ガーッガッ キーッキッ ゴーッゴッ

(5') CV_vNCV_N ガーンガン キーンキン ゴーンゴン

このように一音節語基において重複する形態を作った場合には、(1')～(3')では末尾の特殊音節が、(4')、(5')では繰り返された語基の長音がそれぞれ脱落する。しかしながら、これらの理由は明らかではない。

3.4 二音節語基

- (1) CVCV_Q バダッ グラッ カサッ
 (2) CVCV_N バダン ボドン ゴロン
 (3) CV_QCV ドッカ ベッタ ボッタ

基本的にこの3つのパターンが挙げられる。共通語の「ぐい(と)」や「はた(と)」のような単なる二音節語基のものは津軽方言には存在せず、津軽方言では「グイッ(ト)」のように必ず促音を伴って現れる。

3.5 二音節語基の重複

次に二音節語基の重複した形態をみていく。津軽方言では、「3.4 二音節語基」で取り上げた(1)～(3)の形態すべてにおいて重複した形態を作ることが可能である。しかし、その場合には一音節語基の場合とは違った現象が現れる。

- (1'a) CVCV_QCVCV バダッバダ グラッグラ カサッカサ
 (1'b) CVCVCVCV バダバダ グラグラ カサカサ
 (2') CVCV_NCVCV_N バダンバダン ボドンボドン ゴロンゴロン
 (3') CVCV_QCVCV ドッカドカ ベッタベタ ボッタボタ

まず、(1)の形態から重複した形態を作る場合には、(1'a)、(1'b)の2つの形態を作ることが可能である。(1'a)に関しては「3.4 二音節語基」で示した形態を繰り返して「3.3 一音節語基の重複」で示した、末尾の特殊音節が脱落する法則に基づいて作られているといえる。しかし、(1'b)に関しては「3.4 二音節語基」に示したとおり、単なる二音節語基のものは津軽方言に存在しない。そこで2通りの考え方をすることができ。1つは重複した形態を形成する場合に限り、単なる二音節語基のものとして存在できるという考え方である。そしてもう一つは、(1'a)の語基のCVに挟まれた促音が脱落するという考え方である。どちらが整合性のとれた考え方を、一音節語基の重複した形態から考えてみる。まず「CV_QCV ガッガ サッサ ボッポ」の形態からはCVに挟まれた促音が

脱落した「CVCV ガガ ササ ボボ」のような形態は形成されない。また「ラ」が後続する形態に単なる二音節語基のものが存在する（詳しくは3.6「ラ」参照）。それらのことから津軽方言の二音節語基の形態から重複した形態を形成する場合には、単なる二音節語基の形態が現れるとすべきである。

次に(2')の形態を見ていく。一音節語基においてCVの形態から重複した形態を作る場合には、末尾の特殊音節が脱落するという法則から、「CV_NCV ガンガ バンバ ボンボ」のような形態が形成された。しかし、二音節語基の場合にはこの法則が適応されず、(2')のような形態が形成される。

次に(3')の形態を見ていく。(3')の形態では繰り返されたCV_QCVの促音が脱落している。これは一音節語基の法則に準ずるものであると考えられる。このとき、繰り返されたものが(3'a)のように有声化する場合もある。

(3'a) CV_QCVCVCV ドッカドガ ベッタベダ ボッタボダ

これは津軽方言において、いわゆる「カ行・タ行の非語頭の有声化」といわれる現象と関わっている。この現象の例外の1つに「促音の次は有声化しない」というものあり、その条件によって、

(3) CV_QCV ドッカ ベッタ ボッタ

のように有声化していなかったものが、重複した形態を形成して繰り返された部分の促音が脱落することによって、(3'a)のように有声化する場合がある。もちろん(3')のように有声化しないままで現れる場合もある。

3.6 「ラ」

この「ラ」は共通語の「り」（「ばたり」や「ぼとり」など）に対応すると思われるもので、これが後続すると柔らかさや広がりといったニュアンスが付加される。そうした点から、この「ラ」が後続するオノマトペは「擬態語的」とはいえる。

(a) バダッテ オッケッタ (ばたっと転んだ)

(b) バダラッテ オッケッタ (ばたっと転んだ)

(a) の例では動作や音にスピード感や激しさが感じられる。それに対して (b) では動作や音に鈍さが感じられる。

「ラ」は津軽方言では基本的に二音節語基のものに後続して 1 つの形態をなす。その際、(1) のように「3.5 二音節語基の重複」においても触れた、単なる二音節語基のものが現れる。

(1) CVCV ラ バダラ グララ⁽³⁾ カサラ

(2) CV_QCV ラ ドッカラ ベッタラ ボッタラ

「ラ」が後続し得るのはこの 2 つで、二音節語基に撥音のついたものには「ラ」は後続しない。

3.7 「ラ」が後続した語基の重複

(1') CVCV ラ CVCV ラ バダラバダラ グララグララ カサラカサラ

(2') CV_QCV ラ CVCV ラ ドッカラドカラ ベッタラベタラ ボッタラボタラ

「ラ」の後続する形式において重複した形態を形成する場合には、「語基 + ラ」を繰り返すだけでよい。また (2') の形態において、繰り返された CV_QCV の促音が脱落し、繰り返されたものが (2'a) のように有声化する場合がある。これは「3.5 二音節語基の重複」の場合と同じである。

(2'a) CV_QCV ラ CVCV ラ ドッカラドガラ ベッタラベダラ ボッタラボダラ

4. 助詞の接続

4.1 「ト」・「ド」

共通語でいうところの「ぱたりと」や「ことっと」の「～と」である。津軽方言では「ト」のように清音で現れる場合と、「ド」のように濁音で現れる場合がある。両者の違いは直前の音によっている。特殊音節の促音

と撥音が来た場合には「ト」となり、それ以外のもの（長音は除く）が来た場合には「ド」となる。

(1) 「ト」

(a) バタント（ばたんと） ゴロント（ごろんと）

(b) バダット（ばたっと） ビット（きちんと）

(2) 「ド」

(a) ズッタド（ずっしりと） スパスパド（てきぱきと）

(1) において、長音の場合も「ト」が選択されるのであれば、特殊音節の場合には(1)、それ以外には(2)ということではっきりと分類できるのであるが、注1や注2で述べるように、津軽方言の一音節語基において末尾が長音になるものは、かなり特殊なものである。一般的に文として発話される場合には、必ず長音の直後に促音を伴い、ピューット（ぴゅーと）のように発音されたり、共通語で畳語の形をとるもの（「ぴゅーぴゅーと」や「ぼーぼーと」）であっても繰り返される部分の長音は脱落して現れる。

(b) ピューピュド（ぴゅーぴゅーと） ボーボド（ほうほうと）

4.2 「テ」

この「テ」は共通語においては、オノマトペに後続する助詞としては存在しないものである。津軽方言においては「テ」を後続させるものであっても、共通語では「と」を後続させている。津軽方言において、これを「ト」と区別することによって得られる働きについては後述する。この「テ」は促音を伴って「ッテ」のように現れる場合と、そのまま「テ」で現れる場合とがある。両者の違いは直前の音にあり、特殊音節の促音と撥音が来た場合には「テ」となり、それ以外のもの（長音は除く）が来た場合には「ッテ」となる。

(1) 「テ」

(a) バタンテ（ばたんと） ゴロンテ（ごろんと）

(b) バダッテ (ばたっと) ボダッテ (ぼたっと)

(2) 「ッテ」

(a) バダラッテ (ばたんと) ガンガッテ (がんがんと)

ここで問題になるのは、この促音をどのように考えるかということである。(1) も含めて考えると、「テ」は常に促音を伴った形で現れ、直前に撥音をとった場合にのみ、その促音が脱落すると考えた方がまとまりがあるように思われる。しかしながら、(1) の (b) に挙げた例において「バダッテ」を「バダ+ッテ」としてしまうと、「バダ」単独のものを二音節語基に認める必要がでてくる。先に述べたように、津軽方言には単なる二音節語基のものは存在しないため、このように解釈すると矛盾点が生じてしまう。そのため、上記のように2つのパターンでとらえる必要がある。

4.3 「サ」

共通語でいうところの「学校に行く (ガッコ サ イグ)」のように場所・方向を表す「～に」に相当するものである。「ト」や「テ」のように直前の音によって有声化したり、促音を伴ったりすることはない。基本的に二音節語基の重複した形態のみに後続する。この「サ」がオノマトペに後続した場合には、基本的に動詞「なる」のみが受ける。

(a) ガダガダ サ ナル (がたがたになる) バラバラ サ ナル (ばらばらになる)

共通語では「なる」以外にも「崩れる」や「壊れる」という動詞とも共起するが、津軽方言ではそれらの動詞とは共起しない。

(a') *ガダガダ サ クンズエル (がたがたに崩れる)

*バラバラ サ カエル (ばらばらに壊れる)⁽⁴⁾

津軽方言ではこれらの動詞とオノマトペが共起するときには、助詞「ト」をとる。

(b) ガダガダ ト クンズエル (がたがたに崩れる)

バラバラ ト カエル (ばらばらに壊れる)

4.4 「ト」と「テ」の機能

共通語においては「と」のみで表しているものを、津軽方言では「ト」と「テ」の2つで表している。ここではこれらの違いについて考察する。

(1) 動物の鳴き声

共通語	津軽方言（テ）	津軽方言（ト）
ワンワン鳴く	ワンワンッテ ナグ	*ワンワンド ナグ
メーメー鳴く	メーメーッテ ナグ	*メーメード ナグ
チューチュー鳴く	チューチューッテ ナグ	*チューチュード ナグ
キャッキャッと鳴く	キャッキャッテ ナグ	*キャッキャット ナグ
ヒヒーンと鳴く	インインッテ ナグ	*インインド ナグ

共通語においては、鳴き声によっては「と」をとったり、とらなかったりする。一方、津軽方言においてはすべての鳴き声において必ず「テ」をとる。鳴き声に直接「鳴く」を後続させたり、「ト」をとることはない。仮に「ワンワンド ナグ」といった場合には、犬の鳴き声自体ではなく、激しく速いスピードで鳴いている様子を表すことになる。末尾の特殊音節に関しては、鳴き声を表す場合には脱落しないことが多い。

(2) 副詞

(a) ガダガダッテ オズル（がたがたと落ちる）

(b) ガダガダド オズル（がたがたと落ちる）

(a) はものが落ちるときの音の強さを表している。一方、(b) はものが落ちるときの様子の激しさを表している。

(c) チャワン サ ガッパド モル（茶碗にたくさん盛る）

(d) *チャワン サ ガッパッテ モル（茶碗にたくさん盛る）

典型的な程度副詞である「ガッパ（たくさん）」は「ド」のみをとり、「テ」は決してとらない。

(1)、(2) の例を考えると、「ト」は視覚（擬態語）的であり、「テ」は聴覚（擬声語）的であるといえる。そのため、動物の鳴き声を表す場合

には「テ」のみをとり、典型的な程度副詞では「ト」のみをとる。また様態副詞でも「テ」をとった場合には聴覚（擬声語）的になり、「ト」をとった場合には視覚（擬態語）的になる。

5. オノマトペの派生

オノマトペはそこからさまざまな動詞や名詞、副詞を派生することがある。なかには、オノマトペから派生したのか、動詞や名詞、副詞が先にある、そこからオノマトペが派生したのかははっきりしないものも数多くある。しかし、それらはお互いに関わり合った意味を持っているという点が重要であって、どちらが先かということはさほど重要ではないと考える。

5.1 動詞

5.1.1 サ変動詞

共通語の「～する」は津軽方言では「～ス」で現れる。津軽方言のオノマトペがいわゆるサ変動詞になる場合には、2つのパターンに分かれる。1つは直接「～ス」を後続する場合で、もう1つは「ト」や「テ」を介して後続する場合である。

(1) 直接後続する場合

イガイガス（威張っているようす） タオタオス（長いものがしなっている様子） カタカタス（かたかたする） パキパキス（ぱきぱきする）

これらのパターンはあまり多くなく、二音節語基の重複した形態にしか後続しない。また二音節語基の重複した形態からでも、「ト」や「テ」を介して後続する場合もある。

(1') イガイガドス（威張っているようす）

タオタオドス（長いものがしなっている様子）

カタカタッテス（かたかたする） パキパキッテス（ぱきぱきする）

(2) 「ト」や「テ」を介する場合

カタッテス（かたっとする） ボギッス（ぼきっとする）

このように、基本的に二音節語基の重複する形態以外にサ変動詞を後続させる場合には「ト」や「テ」を介した形で現れる。ここでの「ト」と「テ」の違いは「4.4『ト』と『テ』の機能」で述べたところと同じである。

5.1.2 「～メグ」

共通語でいうところの「～めく」である。津軽方言の「～メグ」は共通語の「～めく」よりも生産性が高く、共通語では「～ける」（よろける、だらける）や「～つく」（ねばつく、うろつく）をとる語であっても、津軽方言では「～メグ」で現れる。

- ・ヨタメグ（よろよろする） ・グラメグ（だらだらする）
- ・ネバメグ（ねばねばする） ・ゴロメグ（ごろごろする）
- ・タズメグ（躊躇する） ・マゴメグ（まごつく）
- ・マホメグ（ぼーっとする） ・グダメグ（ぐだぐだいう）
- ・バヤメグ（うろつく）

5.1.3 「～ダグ」

先に述べた「メグ」と同じく、オノマトペに後続し、動詞を形成するものである。しかし、「ウルウル」（あわてふためく）にしか後続しない。

- ・ウルダグ（あわてふためく）

5.1.4 動詞

この章の冒頭で述べたように、ここに挙げるものは必ずしもオノマトペから派生したとはいえないものである。ただ、お互いに深く関わり合っていることは確かである。ここでは一部の代表的な語を取り上げる。

(1) オジョム

足がすくんで、動けなくなっている様子を表す語である。

(2) ゲンジュエル

鳥がさえずる様子を表す語である。

(3) ジャゲル

舗装していない道路やグラウンドが雨で濡れて、泥田のようになっている様子を表す語である。

(4) ニタカム

にやにやと笑っている様子を表す語である。「ニヤニヤス（にやにやする）」となれば、腹部の不快感を表す。

(5) タズ

雨漏りのように水が滴っている様子を表す語である。オノマトペでは「タツタツ」と「ダズダズ」がある。「タツタツ」と比較して「ダズダズ」は激しいニュアンスが付加される。「タズタズ」は存在しない。

5.2 名詞

動詞と同じく、ここに挙げるものも、オノマトペから派生したとは必ずしもいいきれないものではある。しかし、前述の動詞と比較すれば、オノマトペから派生したと考えた方が、蓋然性の高いものが多い。ここでは代表的な4例を挙げる。

(1) プンプ・メンメ

津軽風につけるもので、総称としては「うなり」という。和紙を張ったものはプンプといい、ゴムを張ったものはメンメという。それぞれ、風を揚げた際に震えて「プンブン」や「メンメン」といった音を出す。津軽風では、風の大きさや飛ばし方のうまさと同じように、この「うなり」の音も重要視されている。

(2) ギッツ

ばったの総称である。津軽方言ではショウリョウバッタやキリギリスなど一般的にイメージされる形のバッタのことを「ハッタギ」といい、コオロギ（津軽方言も同形）や鈴虫（津軽方言も同形）などの形状のバッタとは区別する。しかしそれらのいわゆるバッタ類を総称して「ギッツ」と呼ぶことがある。キリギリスの鳴き声に由来すると考えられる。

(3) ドンコドンコ

ねぶたを表す幼児語である。幼児に対してねぶたが来たことを教えるときに「ホラッ、ドンコドンコキタヤ（ほら、ねぶたが来たよ）」のように使用する。ねぶた囃子の太鼓の音に由来すると考えられる。ねぶた囃子は「太鼓」・「横笛」・「チャガチャガ（二枚の皿状の金属をこすり合わせて音を出す）」によって構成されるが、一番目立つ太鼓の音がその中から選択されたと思われる。太鼓の音であれば一般的には「ドンドン」であろうが、幼児語として使用されたために、津軽方言でいわゆる「指小辞」とされる「コ」が接続したと考えられる。

(4) ビダ

メンコのことである。たたきつける動作やその際に発する音に由来すると考えられる。

6. おわりに

以上、津軽方言のオノマトペの音韻構造、及び、わずかながらではあるが、助詞が後続した際に派生語の一部を記述・分析した。本来であれば、音韻構造をさらに詳しく記述し、一覧表を作成した上で、分析に望む必要があったと思われる。さらに、派生語の問題においても、オノマトペで最も重要であるといえる、副詞や形容動詞に触れることができなかったのは、甚だ不十分であったといわざるを得ない。猛省の極みである。それらの問題については、稿を改め、さらに詳しい記述・分析を目指したい。また、浜野（2014）では、方言のオノマトペに見られるアクセントの体系的な研究も、全く未踏の領域であると述べられている。「カラカラ」や「ゴロゴロ」など、視覚（擬態語）的なものと聴覚（擬声語）的なものの2つの意味を持つオノマトペは、アクセントによって意味的に弁別されている。そこにどのような規則があるのか、という点に関しても、今後の研究で明らかにしていきたいと考える。

注

- (1) 津軽方言の促音 /q/ は、基本的には共通語と同じく無声子音 [p] [t] [k] [s] [ʃ] の重ねである。ただし、その持続時間は短く単独では一音節を構成できない。「3.1 一音節語基」で示した (1) の「ガッ」「サッ」「ボッ」の例も、基本的には次に助詞の「ト」や「テ」を伴って、「ガット」[gatto]「サット」[satto]「ボット」[botto] のように現れる。しかし「3.2 (3) CVv と (4) CVvQ の違い」で示した、いわゆる 1 語文のような特殊な状況下では、末尾に促音が現れる例がある。その場合には子音の重ねではなく、声門閉鎖音 [ʔ] で「ガッ」[gaʔ]「サッ」[saʔ]「ボッ」[boʔ] のように現れる。声門閉鎖音は、共通語では驚いたときに発せられる「あっ」[ʔaʔ] のような場合に現れる。また鹿児島方言では「柿 カッ」[kaʔ] のように現れる。

津軽方言の撥音 /N/ は、基本的には共通語と同じく口蓋垂鼻音 [N] である。ただし、その持続時間は短く単独では一音節を構成しない。これは文末など後に他の音が続かない場合に現れる。しかし、後に何らかの音が続く場合には、それが現れる音声環境によって異音となって現れる。[n] (後続子音が [t] [d] [s] [z] [r] の場合)、[m] (後続子音が [p] [b] [m] の場合)、[ŋ] (後続子音が [k] [g] [ŋ] の場合)、[N] (語末の場合)。津軽方言の長音 /v/ は、共通語と比較してその持続時間が短く、単独では一音節を構成しない。共通語における長音の解釈は「直前の母音を引く音素」とする立場と、「同質の母音の連続」とする立場に分かれる。本稿では、津軽方言の長音は一音節を構成せず、母音の長短に明確な音韻的対立があるとはいえないことを踏まえ、同質の母音の連続とする立場をとる。単独母音との区別はゼロ子音 /ʔ/ の有無によって表す。

- (2) 津軽方言の特殊音節は柴田武 (1962) でいわれているように、単独で一音節を構成しないいわゆる「シラビーム方言」である。基本的には前の音節と結びついて一音節を構成し、場合によっては脱落してしまう場合もある。しかし、オノマトペのような物事の音や状態を表現する語のような特別の場合には、その存在を明確なものとしてとらえた方が全体の体系をとらえやすい場合がある。本稿において末尾の長音を一音節語基の構成要素としてとらえているのは、そのような理由からである。
- (3) この「ラ」が後続する場合に、「グラ」のように直前の音が「ラ」である場合には少々後続しづらい場合がある。しかし、まったく後続しないという訳ではないので、全体の体系のことを考慮して、ここでは「グララ」を例として挙げている。
- (4) ここで述べたように、(a')*ガダガダ サ クンズエル (がたがたに崩れる) *バラバラ サ カエル (ばらばらに壊れる) は津軽方言では非文である。

る。しかし、この「サ」を「ニ」に変えると「*ガダガダ ニ クンズエル」は同じく非文であるが、「バラバラ ニ カエル」は成立する。これはオノマトペが相当する副詞の問題であるのか、「クンズエル」や「カエル」といった動詞の問題であるかは、大変興味深いところではあるが、稿を改めたいと考える。

引用・参考文献

- 佐々木隆次（1971）「擬声語・擬態語語彙集－旧青森市方言－」（上・下）（私家版）
- 柴田 武（1962）「音韻」（『方言学概説』武蔵野書院）
- 竹田晃子（2012）『東北方言オノマトペ用例集－青森県・岩手県・宮城県・福島県－』（国立国語研究所）
- 田守育啓（1991）『日本語オノマトペの研究』（神戸商科大学研究叢書 XL）
- 鳴海助一（1965-69）『津軽のことば』（上・中・下）（津軽のことば刊行会）
- 服部四郎（1960）『言語学の方法』（岩波書店）
- 浜野祥子（2014）『日本語のオノマトペ 音象徴と構造』（くろしお出版）
- 松木 明（1982）『弘前語彙』（弘前語彙刊行会）

（さかもと ゆきひろ・東奥義塾高校教諭）